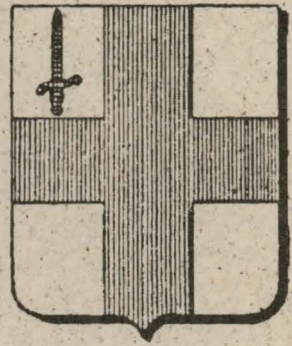


海運省 ロンドン港への照会

オフィス 227B.H.D.



1834年10月17日

問い合わせ番号：101734122703

件名：捕鯨船シーシャーク号船長、ロビンス船長の報告

調査員：ロンドン港副局長、J.S. ウィード・エステート

報告：

我々がインスマスの港で過ごした夜は、ハレー彗星の通過のため明るく照らされていた。幾人かの男達が、酒場でたむろしていた。我々の積み荷はジョナス・H氏が買い取ってくれた。私が船の甲板に立っていると、漁師小屋から煙が立ち上っているのが見えた。その黒く油っぽい煙は、強い潮の臭いがした。そんなとき突然、1人の怪我を負った男が私の船の上に転がりこみ、そして倒れ気絶した。

私は怪我を負った男のためにできるだけのことをした。彼を追い回していた人々(そのうちの幾人かは、インスマスで面識のある人であった)が、私に男を見なかったかと尋ねたが、このような血に飢えた野蛮な者どもに、女王陛下の臣民を好き勝手に扱うことを許して置くことは出来なかった。彼の手にはびりびりに破れた紙が握られており、これによって彼の国籍とその他の貴重な情報を知ることができた。

彼の意識は、我々がまた獲物を求めて航海に出るという頃、ようやく戻った。それから一週間も経つと、彼はかなり回復したようだったが、インスマスで何が起こったのか話すことについてはかたくなに拒んだ。彼は毎晩、悪夢にうなされているようだった。

船がアメリカの領海を出ると私は船の乗組員に、私の知っている

僅かばかりの事を話した。乗組員達は「ああ、かわいそうに」と口々に言い、ひそひそとジョナスについての噂話をするようになった。何人かの乗組員達は、呪われた者がこのシーシャーク号に乗っている事を確信し、きっと不幸が起こると考えた。甲板員のオリバーなどは彼とすれ違う度に唾を吐いていた。

風が弱くなった。蒸気船のマーメイド号は我々よりも、一週間後に出港したのだが、やがて我々の船に追いついてしまった。マーメイド号の船長から、哀れな彼の所有物がセリで売り払われたことを聞いた。特に素晴らしいライフルは、途方もなく安い値段で売却され、地主であるジャグとかいう人への支払に充てられたとの事だった。

私は彼について、もっと詳しいことを知りたいという好奇心を持っていた。ある時、彼があ町の野蛮人から逃げ回っていた間もずっと、衣服の下に隠していたらしい天体の図を取り上げようと試みた。するとその瞬間、彼は急に暴力的になってしまった。オリバーの足をフォークで突き刺した時には、彼を捕まえるために5人の男とチェーンが必要となった。

彼の持っていた何枚かの図は、尋常の物ではなかった。そのうちの一枚には、汗によるシミで汚れてはいたが一匹の不格好な怪物が描かれており、極彩色の星座の下で吠えているかのようなであった。それらの構図は全く正確ではなく、そのスケッチは明らかに狂人の手による作品であった。

この後に続く航海は、悲鳴と嵐の連続であった。我々はついに一頭の鯨も見つけることが出来ぬまま帰港せざるを得ないことになった。

1834年10月17日 ロンドンで記録された。

私、キャプテン・ジョージ・ロビンスは、慈悲深き女王陛下の代理人、J.S. ウィード・エステートの面前で作成されたこの報告書が、疑いなき真実であることをここに厳粛に宣誓致します。

キャプテン・ジョージ・ロビンス
J.S. ウィード・エステート